

---

領域名：精神保健看護

報告者：望月 花

---

教育及び実践の課題

---

3年次の講義・演習において、精神疾患の急性期にある患者は自我が脆弱であったり思考が混乱していたりするため、自らの行動の理由を説明することが困難になること、およびこの時期に構築する信頼関係は、その後の関係性やリカバリーにも影響することを伝えている。しかし、患者、学生双方を守る観点から、急性期患者を学生に担当させることはなく、講義・演習での急性期看護の学びを実習で体験的に確認してもらうことは十分にできていなかった。

---

活用した論文の概要

---

人は本来、周囲から受入れられ尊重されたいという思い (Personhood) をもっており、この思いを支援することがリカバリーに重要である。精神科急性期病棟において、Personhoodが安心 (safety) の経験と認識に及ぼす影響について明らかにすることを目的に、急性期病棟入院経験者へ半構造化面接を実施した。その結果、対等に接する、尊重する、選択できる環境を作るといった看護師の関わりが患者の Personhood への支援となること、それによって患者は安心 (safety) を認識することを報告している。

---

教育及び実践への活用

---

講義では、まず上記3つの関わりを事例を挙げて紹介したうえで、看護師が治療の入り口である急性期に、安心できる関わりを患者に提供することによって培う信頼関係が、その後の治療関係やリカバリーに影響することを伝えた。学生は、急性期、回復期などの病期によって関わり方が違うことや、個人として向き合っただけで患者に関わる必要性を学んでいた。

演習では、急性期における対応を学ぶ際に看護師の立場だけでなく患者の立場でも考えて話し合ってもらい、その後3つの関わりを再度提示した。学生は、最初は患者の幻覚妄想や易怒的な行動を怖がっていたが、患者自身も幻覚妄想により自我が脅かされ怖い思いをしていることに気づき、患者に、自分が尊重されていると感じてもらうためには、看護師は患者の立場になって考えることが必要であると学んでいた。

実習では、看護師に急性期の患者-看護師関係の構築が、その後の治療関係、リカバリーへ影響したと思われる体験を語ってもらうことを計画したが、Covid-19流行によって実習期間が短縮されたため実施できなかった。講義・演習では学びを積み上げることができたが、実習でより体験的に確認してもらうことは今後の課題である。

---

参考文献

---

Cutler N. A., Sim J., Halcomb E., Stephens M., Moxham L. Understanding how personhood impacts consumers' feelings of safety in acute mental health units: a qualitative study. *International Journal of Mental Health Nursing* 2020;30(2):479-486

---